様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ２０２２３

研究課題名（和文）中欧の美術教育から構造化した他者と共同する造形の授業による教員養成の基礎研究

研究課題名（英文）Basic research on teacher training through collaborative art creation classes with others structured from Central European art education

研究代表者
家崎　萌（Iezaki, Moe）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：７０９０８７０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：予測困難な状況に主体的に関わる資質・能力の育成に資する「コンフリクトに向き合う場」に焦点を当てた、教員養成における他者と共同する美術教育授業の教材開発のため、中欧の美術教育を手がかりとして文献及び国内外の研究者へ取材調査を行った。教材開発の軸となる「オープンフォーム（Open Form）」という理論を構造化した美術館や教育機関で取り組まれている実践について取材し、日本でパイロット実践に取り組んだ。これらの研究の成果について、国内外の学会で発表し、執筆した論文は学会誌等に掲載された。また研究のまとめとして報告書を作成し関係機関に配布することで、研究成果の公開に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会が急激に変化していく今日、ものや人、情報の往来はその範囲や速度、関係の仕方の複雑性を増している。わが国でも、多様な背景をもつ人々との共生へ向けてどのような資質・能力を育成すべきか教育に問われている。本研究では美術教育の教員養成において、他者との共感的なかかわりに加え、いかにコンフリクトに向き合うかを問う教材開発を目指し、地政学的に他者とのコンフリクトに絶えず対峙してきた中欧の美術教育の一端を明らかにし、その構造を日本の実践へ展開する要点を得た。わが国の教育課題に資する大学授業の教材として、理論的構造と実践可能なモデルを示した。

研究成果の概要（英文）：In order to develop lesson plans for art education classes in which students collaborate with others in teacher training, focusing on "places to face conflicts" that contribute to the development of competency to proactively engage in unpredictable situations, we conducted literature reviews and interviews with researchers in Japan and abroad, referencing art education in Central Europe as a suggested predecessor. Interviews were conducted on the practices of a museum and educational institutions that have structured "open form" theory which is the axis for developing educational materials, and pilot practices were conducted in Japan. The results of these studies were presented at academic conferences in Japan and abroad, and the related papers were published in academic journals. In addition, we edited a report as a summary of the research and distributed it to relevant organizations to publicize the research results.

研究分野：美術科教育

キーワード：美術教育　教員養成　オープンフォーム　中欧　他者　プロセス　コミュニケーション　コンフリクト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

報告者（研究代表者：家﨑萌）は，小学校図画工作科専科教員としての実経験を踏まえ，2016年から日本とチェコを往還しながら場と造形活動の関わりを研究してきた。中欧諸国は，地理的に西欧諸国とロシアに挟まれ歴史を通して他者と共存，競合してきた国々である。美術の領域では，悲劇と喜劇が同時に含まれるような矛盾を孕む不条理の表現が特徴的で，それは困難や矛盾に向き合う表現と捉えられる。わが国でも，多様な背景をもつ人々との共生へ向けてコンフリクトに向き合う場面は今後さらに増えていくことが予想される。美術教育においても，他者との共感的なかかわりに加え，いかにコンフリクトに向き合うかを問う必要がある。そこで，着目したのがチェコ共和国のカレル大学における「オープンフォーム」を応用した美術教育実践である。建築家オスカー・ハンセン（Oskar Hansen）が提唱した，標準化され得ない人間の柔軟性やプロセス性を重視し，他者と共同で空間を変化させコミュニケーションしていくオープンフォームの理論や実践は，ポーランドの美術アカデミーで1960年代から展開し，その後チェコに取り入れられた。カレル大学の事例分析から，意図的に規定された場を学生が共有しつつ，材料を用い連続して空間をつくりかえながら，互いの齟齬を言語化していく教育実践が，教員養成に有効であることが示唆された。ただし，これまでの研究はチェコでの取材に基づくもので，本来派生してきたポーランドでの調査が不足している。

２．研究の目的

本研究では造形活動において自らの意図と異なる他者に出会い，試行錯誤する状況を「コンフリクトに向き合う場」と定義する。教員養成の観点から，自らの意図と異なる他者との出会いは重要である。子どもは，造形行為を通して物や人とやりとりしながら，思い通りにいかない困難と出会いつつ，試行錯誤を重ねることで創造的な態度や思考を身につけていく。そのため，教員志望の学生が「コンフリクトに向き合う場」として造形活動を捉えることで，子どもの学びや成長の契機を積極的に担保する姿勢を培う必要がある。本研究では，今日の予測困難な社会に求められる資質・能力を踏まえた図画工作の授業づくりを実現する指導者養成の観点から，中欧の美術教育実践を手がかりに，教員志望の学生が「コンフリクトに向き合う場」について実践的に理解することができる大学授業の教材開発のため，その基礎となる土台の構築を目的とする。

３．研究の方法

（１）取材調査（国内）

美術教育の実践においてどのように他者を捉えるか，他者とのやり取りをどう考えるかという問いについて，関連した研究に新潟大学の佐藤哲夫と茨城大学の金子一夫のものがある。両氏の理論や実践は中欧の美術教育との直接的な参照関係にあるわけではないが，実践の構造，他者への焦点という点でオープンフォームに通じる洞察を与えるものである。中欧の美術教育と日本の美術教育との接点を探るため，両氏の研究についてインタビューの方法により取材する。

（２）文献調査

戦後ポーランドの共産主義政権下で，建築家オスカー・ハンセンにより提唱されたのがオープンフォームと呼ばれる理論である。ハンセンはワルシャワ美術アカデミーで教鞭をとり，学生たちと共に「動的な背景」あるいは「非制度的空間」を探索する演習としてオープンフォームを展開させる。関連資料に基づき，当時のポーランドの芸術領域の動向と照らしながら，アカデミーでのオープンフォームを巡る動きとその背景を探る。

（３）取材調査（ポーランド）

オープンフォームに関する研究調査をリードしてきたワルシャワ近代美術館，オスカー・ハンセンの出身大学であるワルシャワ工科大学にて専門家にインタビュー調査を行う。オープンフォームと関連の深い美術館の館外教育プログラム『Primary Forms』の開発経緯や現在のワルシャワ工科大学での教育実践について取材する。

（４）パイロット実践

オープンフォームを応用した小規模な演習を日本の教員養成課程で実践する。演習は，授業外のワークショップとして設定し，各回で環境設定や制作の条件を変更する。参与観察や固定ビデオカメラによる記録データ，参加者の振り返りの記述を基に，実践の設計方法，プロセスの実際，参加者の学びについて検証する。

４．研究成果

（１）取材調査（国内）の成果

佐藤哲夫氏（新潟大学），金子一夫氏（茨城大学）へのインタビュー取材を行い，その成果を科学研究費補助金報告書『中欧の美術教育から構造化した他者と共同する造形の授業による教員養成の基礎研究』にまとめた。以下にその要点を示す。

佐藤氏は，特に美術作品の鑑賞における対話をエマニュエル・レヴィナスの超越的な他者の観点から論じている。学校教育では，対象化できる色や形，言葉といった共通ベースに基づく同一者コミュニケーションが前提される。他方，共通ベースに依らず他者への応答を触発されるというかたちで成り立つ他者コミュニケーションがあり，同一者コミュニケーションとは異なる対話の可能性を拓く。また，対話の参加者のかかわりあう仕方として，二人称関係と三人称関係の相違を踏まえる必要がある。相手と自分との関係である二人称関係と，他の複数の人との関係である三人称関係は全く異なる対話の前提である。三人称関係における対話は客観性に基づく社会的な関係のなかで枠づけられるが，二人称関係により構築された対話には，第三者に理解不可能な内容が現れ得る。二人称関係において応答するという他者との対話の構図が，同一者コミュニケーションだけではない，美術の鑑賞における他者コミュニケーションにおいて重要である。

金子氏は，茨城大学の片口直樹氏による特別支援学校の生徒と大学生による絵画の交換制作の実践について同氏との共著にて沈黙交易・贈与交換の観点から論じている。美術教育における超越的な外部としての他者について論じ，そのような他者との交換を贈与交換の観点から美術教育学のシステム解明を探究している。これまでの美術教育論に教師を位置づけるための理論的枠組みが贈与交換であり，非対称な交換が特徴である。矢野智司のいう生成としての教育の論を照らすことで過剰な贈与性をもつ教師のイメージが把握できる。返礼を意図しない純粋贈与は，教育の至高性（バタイユ）の実現と考えられる。贈与交換，相互交換，純粋贈与の三層からなる美術教育学のシステムの位相では，外部参照性を担保する参照源がシステムに組み込まれている。計画的に教える教育か，出会い的なものを重視した教育かという二項対立に仕立てるのではなく，陶冶と出会いを統合的な理論とする必要がある。このような課題が贈与交換システム論という理論的作業による研究の背景にあった。

（2）文献調査の成果

文献調査の成果として，学術誌『美術教育学研究』55 号に「戦後ポーランド発祥のオープンフォーム理論と美術教育の展開についての考察」と題した論文を発表した。以下にその要点を示す。

クローズドフォームの標準化や画一性による量の論理に対するアンチテーゼとして，オープンフォームが掲げるのは質の論理であり，集団の中の個人に焦点を当て，変化可能性やニーズを建築空間の構成に組み込もうとする。また，客観的要素と主観的要素の相互浸透は，主体的な位置や空間の選択，多様な人々の参加，プロセスにおける要素を認識する言語伝達を通し，適切な背景を参加者自身の手によってつくり変化させていくことで生じ得る。このようなハンセンの理念は具体的な作品から読み取れ，例えば，《チョークチェーン》（1957）と呼ばれる彫刻は，鑑賞者の動きによって構造が変化して見えるため，主観と客観の相互浸透を生み出す装置と捉えられる。

オープンフォームの建築領域から美術領域への展開には，共産主義政権下の政治的状況における社会主義リアリズム，抽象表現を中心とするモダニズムへの抵抗，芸術家たちの現実への眼差し，新たな表現形式や技術の適用等のポーランドにおける芸術，美術の動向との関連に加え，スケーラビリティという建築における実装可能性の課題も影響していた。さらに，社会は個人の成長を可能にすべきとするオープンフォームのマニフェストに見出されたハンセンの教育的な理念は，美術アカデミーにおける教員と学生による実験的演習や制作を支える基盤となっていた。

今日の日本の教員養成における美術教育を考えるときにも，客観的要素と主観的要素の相互浸透やプロセスの認識を重視するカリキュラムは応用可能性がある。けれども，ハンセンの理論がモダニズムに対峙してこそ生み出された経緯も忘れてはならない。オープンフォームがモダニズムと不可分の関係にあり，美術アカデミーという教育機関を中心に展開していった事実は，近代に成立した教育制度の枠組み内にある義務教育課程における美術教育を考える上でも要点である。ねらいに基づき計画する教育にどのように客観的要素と主観的要素の相互浸透の論理を組み込むか，ハンセンが重視した具体的な人々の想定のもと丁寧に考えていく必要がある。

（3）取材調査（ポーランド）の成果

ワルシャワ近代美術館の学芸員，ワルシャワ工科大学の教員にインタビュー取材を行い，その成果を科学研究費補助金報告書『中欧の美術教育から構造化した他者と共同する造形の授業による教員養成の基礎研究』にまとめた。以下にその要点を示す。

① Tomasz Fudala 氏（ワルシャワ近代美術館学芸員）へのインタビュー取材

ハンセンが問題提起したのは，教育における教員と学生間のヒエラルキーであり，その階層性を実体化する教育空間である。階層的で硬直性のある教育システムを変化させるため，ハンセンはオープンフォームの理念を反映した教授システムの図式を考案した。ハンセンが示した改革案では，教員や評価システムの変換が可能であり，学生が複数の教員とのコンタクトを取ることができ，学生同士がグループを形成したり，学生によって異なる結果を創出したりすることができる。より柔軟性の高い教育システムの図式であり，同時に教育環境の空間的時間的なイメージとしても読み取れる。

空間における人々の活動の非階層性と柔軟性，コミュニケーション可能性を担保すべきというオープンフォームの理念は建築の提案においても貫かれた。ユニークな建築設計のアイデア

は，同時代の建築や芸術のアバンギャルドの動きと呼応し合うものであり，1960 年代に現れた日本の新しい建築動向を指すメタボリズムとの影響関係も示唆される。第二次大戦後の CIAM（近代建築国際会議）への批判的動きの中で CIAM の事実上の解体と同時期に新たに組織された Team10 にもハンセンは関与しており，その影響の考慮も重要だ。また，オープンフォームの理念を実現したシュミンのサマーハウスには，1950 年代の建築雑誌に掲載された日本の伝統的建築からの援用が見出せる。

② Anna Maria Wierzbicka 氏（ワルシャワ工科大学）への取材

建築設計に関する最初の学期のカリキュラムでは，具体的な場所へのフィールドワークから始まるデザインを教えている。手順として，手付かずの自然が残るヴィスワ川等の現場に身を置いてからその分析を行い，手描きのスケッチや絵画を制作する。その後，現実の環境にインスタレーションを作成して写真撮影を行い，素材のモデルを作成する。最終的にこれらのアイデアを統合させる 50 分の１のモデルを完成させる。一連のプロセスで自分の手で描くことを特に重視し，建築と人間が常に現実の環境と結びついていることを認識させる。カリキュラムでは，学生を一方的な方向に導くのではなくアイデアを生むまでのプロセスを重視しており，オープンフォームの異なる方法としての応用，バウハウスのアイデアと組み合わされている。

オープンフォームに関する建築のなかで特に注目すべきものは，アウシュヴィッツ・ビルケナウの記念碑コンペティションに提出されたプランである。ハンセンが最終的に示した設計案は「ロード（the road)」と呼ばれる。このロードとは，ナチスドイツによって設計され建設された合理的な建築の構造を取り出したもので，幅 8 メートルの黒い道路が収容所跡地を横断する。記念碑的な彫刻も建築もなく，完全に開かれた形であり，収容所跡地に残された建物は経年風化に委ねて自然の代謝に任されるべきであった。この実現しなかったプロジェクトの影響は，ポーランド南部のベウジェツ絶滅収容所跡に設立された壁の記念碑に明確に見出せる。ハンセンの理論は記念碑では機能したが，住居や都市プランではそれほど機能しなかった。経験するためと住むためという目的の違いによるもので，住むための空間には責任が伴うからである。

③ Sebastian Cichocki 氏（ワルシャワ近代美術館）への取材

「primary forms」とは，ポーランドのワルシャワ近代美術館とローマン・チェルネツキ教育基金とが共同事業として取り組む教育プログラムの名称である。同美術館の館外プロジェクトとしてのコンセプトは「学校環境における美術展」であり，現代アーティストと共同で開発されたオブジェクト等が入ったボックスを学校に持ち込み，子どもと教師が参加し活動が展開される。プロジェクトのオープンフォームからのインスピレーションに次の５点が挙げられる。①アートとはオープンエンドで開かれたものと捉えること，②様々な領域を横断する学際的なアプローチ，③立場の異なる人々が一緒に行うという集団性，④主張することや自律することと同時に他者を尊重するような民主的な演習ツールであること，⑤芸術的な言語によるコミュニケーションの方法について考えること。プログラムの実施に当たっては教師との協働が非常に重要であり，教師を対象にしたワークショップをシュミンのサマーハウスで実施した回もある。

オープンフォームによる実践に組み込まれたコンフリクトへの対峙は民主主義プロセスの基礎である。確かに人々はストレスを感じるだろうが，私たちはこの社会でどうやって生きていくかを学んでいるのであり，コンフリクトを避けるのではなく，解決する方法を学ぶべきだ。モレルズ・ヒルの演習でも対立のような非常に苦痛なプロセスがあるが，プロセスの一部であるディスカッションで，他のグループのジェスチャー，スローガン，行動を分析し，解釈する。それはコンフリクトを受け入れ，議論し，それを脇に置き，望ましくないものを手放すことでもある。この場合，芸術は非常に良い方法となり，それはある種の問題解決で，少なくとも状況を理解するものとなりうる。

（4）パイロット実践

オープンフォームを応用した演習を実践検証した成果として，学術誌『美術教育学研究』56 号に「オープンフォームの要点を組み込む試行的演習の検証―教員養成における美術教育への展開に向けて―」と題した論文を発表した。以下にその要点を示す。

演習設計の要点である「多様な材料とフィールドの設定」「アクションとリアクション」「他者のアクションへのコメント」は，実践で概ね有効に機能していた。身辺材を含む様々な材料は，見立てによる物語の生成や大きな造形的構成の変化など，参加者の多様な表現と解釈のアプローチを可能にした。フィールドは，活動の境界を厳格に定めるというより，多種多様な材料を用いたアクションの連なりを焦点化するためのゆるやかな枠組みとして働いた。また，「アクションとリアクション」という捉え方で活動に取り組むことで，直感的な振る舞いに挑戦したり，他者の意図を読み取ろうと注意深く観察したりと，参加者は自他の感覚や行為に目を向け，その過程で互いのリアクションの特徴に気付いたりしていた。

教員養成における美術教育の演習という観点から，ワークショップでは，アクションとリアクションによる造形的な活動そのものの体験に加え，コメントの組み込みと活動後の省察も重要であった。図画工作や美術の授業は，子ども自身の身体や心を働かせて材料や場，作品等にかかわる表現と鑑賞の活動であるとともに，教師と児童生徒間の言葉によるコミュニケーションが媒介する活動でもある。今回のオープンフォームによる活動とその省察を通し，参加者は，材料を介した自他のアクションの連続による造形のダイナミズムを実感するとともに，言葉による解釈が発想の広がりや展開に少なくない影響を与え，また造形的な行為に対する他者の言葉が，

表現をする上での受容的基盤として働くことを実感していた。このような実感は，図画工作や美術の授業で，教師自身がどのように言葉を用いるのか，子どもが用いている言葉をどのように扱い解釈するかに注意を向ける取り掛かりとなろう。そして，活動後のアンケートの記述や話し合いにより省察の時間を十分に取ることで，参加者が活動を通した自らの気づきを言葉にしていき，それを互いに共有することができた。

これまでオープンフォームによる演習を，試行錯誤を生む「コンフリクトに向き合う場」が構造化された活動と捉えてきた。実践で参加者のアクションとコメントの連なりを追うことで得た知見は，想定外の展開や他者と出会う「コンフリクトに向き合う場」の具体的な現れとして，2 つのレベルで生じる差異を見出したことである。1 つは，物語性を優先するアプローチと造形性を優先するアプローチの質的な差異である。活動の展開では，材料やその配置を見立てて物語的につなげていく行為や解釈と，材料の備える形態や質感を考慮した配置による造形的構成が強く現れる場面が，連続的，断続的に現れた。もう 1 つは，アクションとコメントの連続によってつくり出されていく展開と個人の企図とのズレであり，他者の介入の積み重ねが生み出す不可逆性に伴う差異である。オープンフォームによる演習では，自己の行為は他者の解釈と行為へと引き継がれていくことで，手放した瞬間から差異を生み出し得るものとなる。このように 2 つのレベルの差異が絡み合い，参加者の行為や思考に試行錯誤をもたらしていた。そして，このような差異がもたらすコンフリクトは，参加者それぞれの勝手気ままな自己表現の対立や統合のなさとは異なるものである。参加者の振り返りから読み取れるように，自らの直感的な配置で展開に大きな変化を加える場合でも，それが他者から受け取ったフィールドであり他者へと手渡されるという緊張感の中で行為されていた点を考慮すべきである。異質な他を受け入れる寛容や包摂と同時に，差異に向き合い続ける緊張感や粘り強さが実践上必要となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 家﨑萌	４．巻 55
２．論文標題 戦後ポーランド発祥のオープンフォーム理論と美術教育への展開についての考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美術教育学研究	６．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 家﨑萌、田中詩穂	４．巻 20号
２．論文標題 「オープンフォーム」を応用した場を相互に共有する共同制作／創作―造形表現と身体表現による「一畳プロジェクト」の制作／創作プロセスに着目して―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 金沢学院大学紀要	６．最初と最後の頁 2－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 家﨑萌，松下明日香	４．巻 6号
２．論文標題 イメージ生成の場として働くＩＣＴ機器を用いた手づくり絵本 ―免許法認定講習「保育内容『表現』の指導法」における教材制作を基に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 未来を拓く教育実践学研究：共創型対話学習研究所機関紙（論文集）	６．最初と最後の頁 合計10頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 家﨑萌	４．巻 56
２．論文標題 オープンフォームの要点を組み込む試行的演習の検証―教員養成における美術教育への展開に向けて―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 美術教育学研究	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 家﨑萌
2．発表標題 戦後ポーランド発祥のオープンフォーム理論と美術教育への展開についての考察
3．学会等名 第61回大学美術教育学会宮崎大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Moe Iezaki, Shiho Tanaka
2．発表標題 Ichijo project: Direct and indirect interaction in art educational practice: How intersections of bodies and objects are experienced in an everyday Japanese tatami space
3．学会等名 The InSEA Regional European Congress: Being Radical, held in Baeza and virtually（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Moe Iezaki
2．発表標題 The Structure of Difference and Inclusion in Open Form as Art Educational Practice
3．学会等名 InSEA World Congress 2023（国際学会）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関